

いこっとサポットの会と振り返る

特集

「ぱれっとの家 いこっと」の

座談会

15年

～前編～

【参加者】 谷口奈保子/相馬宏昭/稲澤憲/高取正樹/
田口雄一/カンナル/松村昂明/黒澤友貴/

（進行：南山達郎）

南山：本日はよろしくお願いいたします。まず、「障がいのある人となない人がともに暮らす」といういこっとの発想の出発点について伺います。

●「ともに暮らす場」の発想

谷口：1996年の秋に、アメリカのニューハンブシャー州で3か月間研修をしました。その時に、昔あった2000人規模の大型入所施設が閉鎖され、そこで暮らしていた人たちが補助金を受けながら地域に溶け込んで生活している姿を見て、住まい方の選択肢作りに取り組もうと思ったのがきっかけです。施設から出た人たちは、グループホームだけではなく、職員と共同生活を送る人、同居人を公募して一緒に暮らす人、小さな子どもがいる家に、おじいさん、おばあさんのような役割で住んでいる人、様々でした。その時、やはり一般の人と一緒に暮らすということも考えないと、社会に溶け込むのは難しいと思ったのを思い出します。お互いに学びにもなるし、とも思いましたね。もちろんグループホームは必要ですが、選択肢はいろいろあって良いと思います。

南山：その構想を皆さんが聞いたのが・・・？

田口：たまり場ぱれっとの宿泊行事「プチバカンス」の時だったと思います。当時は宿泊行事の時にこういった運営に関わる重要な話が結構交わされていましたね。その話を聞いて仲間にも声をかけ、サポットの会の原型が出来上がった流れでした。

今年の3月をもって、15年間の事業に幕を下ろした「ぱれっとの家 いこっと」（文中：いこっと）。その運営にご尽力いただいた、いこっとサポットの会のメンバーとともにその取り組みを振り返りました。

高取：私は建築士の資格を持っていたのと、コレクティブハウスというシェアハウスに似た住まい方にも関わっていたので、ワークショップの中心メンバーとして関わってほしいと後日谷口さんから直接お声をいただきました。

稲澤：ここにいるメンバーが実行委員になって、月2回土曜日の午前中に会議を開き、午後はグループホームの職員や当事者、ご家族なども交えた30名ぐらいのワークショップを開催して様々な意見交換をしましたね。



新しい家づくり
ワークショップの様子

●ワークショップ

南山：ワークショップで何か印象的なやりとりはありましたか？

田口：家づくりの意見交換の中で、「お風呂をどうするか問題」と「エレベーターをどうするか問題」について議論したのを覚えています。お風呂については、各階にバスタブ付きの風呂場があったほうが良い、という意見が出ましたが、実際聞いてみるとシャワーだけで済ませているという人も多く、エレベーターについても「障がいのある人が暮らすことを考えると必須！」とする意見はありましたが、それによって部屋数が減り、家賃を含めた運営コストが上がることを考えると、バスタブ付は1階のみ、2・3階はシャワーだけ、エレベーターは無しというところに落ち

着きました。こういうことから皆で話し合っ
て決めていく、というのが印象的でしたね。

高取：ワークショップの始めのころは、「障
がい者と健常者が共に暮らす際にどんな問題を解
決しないといけないか」という話をしたことも
覚えています。そのあと図面が出来てきて、今
田口さんが話したような設計の段階に進み、1
年ぐらい続いたワークショップの後半の6ヶ月
ぐらいは、実際にいこつとで暮らしたいという
人たちが集まって、関係作りを行ないました。

稲澤：シンプルに障がい者がひとり暮らしを考
える上での課題も意見の中にはありましたね。
食事面とか。

南山：ワークショップには確か当事者のご家族
も参加されていたかと思いますが、どのような
意見が出ていましたか？

高取：食事や健康管理についての懸念が出てい
ましたね。それは自立生活を考える上で永遠の
課題だと思います。

相馬：当初はいこつとのリビング（通称：いこ
間）を地域に開かれた形で運営する・・・という
テーマもあったと思いますが・・・。

高取：そのことで言うと、設計段階で可能であ
ればリビングを道路側にして、外から入りやす
い作りにしたほうが良かったかなと思います。
検討はしたのですが、居室との兼ね合いで難し
かったように記憶しています。

田口：そうですね。地域に開かれたシェアハウ
スは、リビングは開かれていて外から出入りし
やすく、プライベート空間は守られているとい
う設計が確かに多いです。

●「いこつと」という名前

南山：そもそもの話ですが、いこつとという名
前が決まったプロセスを伺いたいのですが。確
か谷口さんは最初反対だったとか。

谷口：大反対では無かったですが、「いこつ
と」ってすぐにわかるかなと。

松村：確かワークショップで皆で投票したんで
したよね。ぱれっとといこつとで語呂は良いなと
思いました。元職員の左右木さんの案でした。

高取：ぱれっとの家に行こう！と思えるように
ということで「いこつと」でしたからね。

谷口：ああ、そうなのね。「憩い」から来て
るのかと思っていました。そういう場にな
ってほしいという願いもありましたから。

一同：今頃ですか(笑)。

田口：当時の記録によると、全部で35件の
候補があつて、1次審査、2次審査、最終
プレゼンと進んで決まったようです。

●オープン

南山：1年余りの準備期間を経ていよいよオ
ープンを迎えるわけですが、最初の入居者
は何名でしたか？

稲澤：私と松村さんを入れて6名でした
ね。金森賢一さんや林利枝子さんも最初の
入居者です。オープンしてすぐぐらいに、
私も松村さんも仕事が忙しくなって帰宅が
遅くなり、毎日は顔を合わせられない状況
になってしまいましたけど・・・。

松村：そうですね。私はそれまでのワーク
ショップの盛り上がりや、実家からいこつ
とに越して初めてのひとり暮らしというこ
ともあつて、しばらくは非日常感が続いて
いました。新聞の取材もありました。でも
日々の暮らしは日常ですし、休日もそれぞ
れ予定もあつたり、しばらくして当初の盛
り上がりが落ち着いてきた感じですかね。

田口：誕生会とか、料理教室とかイベントも
やりましたね。料理教室はオープン当初から
途中開催できない期間もありましたが、50回
ぐらい開いたんじゃないでしょうか。

相馬：その時の先生（山野さん）は今もつ
ながっていて、グループホームの料理教室
にご協力をいただいています。

●谷口さんの感じた違和感

谷口：オープンしたての頃は暮らしている
人たちが前から知っている人たちだったの
で、見ていて不安は無かったですが、私の
思った形とはちょっと違うなと感じたのは
覚えていますね。

南山：それはどういう？

谷口：例えば台所で顔を合わせて一緒にご
飯を食べるとか、日常の中にもっと「とも
に過ごす時間」があると思ったんです。で
も仕事が忙しかったり、外で予定があつた

りしてなかなかお互いに顔を合わせる時間が無くて。一般の人の働き方を改めて知らされました。日常的に家で過ごす時間が短かったです。

最初は新聞に取り上げられたり、1周年のシンポジウムも開いたりして、そういう中から興味を持った人が入居してきたりしました。入居者ミーティングも月1回必ず開いていましたが、最初に思い描いた暮らしのイメージとは違っているなという違和感が残っていました。

稲澤：後から入居してきた、障がいのある人に接したことの無い人にとっては、「どこまで手伝えれば良いのだろう」という疑問はあったようです。遠慮というか。一方で一旦仲良くなると今度は距離感が近くなりすぎて、そこから起きる問題もあったように思います。相手が障がい者だから遠慮してしまったり、逆に近くなりすぎて助けてあげないと、という気持ちからだったのか、今となってはわかりませんが。

谷口：私はいこつとで障がいのある人を特別扱いせずに、ごく普通の人間関係が作れると思っていたのですが、なかなか難しいことでしたね。サポットの会でも個人ケースが取り上げられることが増えていきました。

●障がいがある人の入居

南山：身近ではありますが障がいのある人の入居希望者も少しずつ増えてはいました。いこつとの話聞いて興味を持ち、家族の反対はあったけれどもぱれっとの後押しもあって入居した人もいました。2年ほど暮らして家族のところに帰りましたが、良い経験になったと後に話していました。

カン：その方は、私も「どうしたらいこつとで暮らせるか」という相談を受けました。お母さんに何度も頼み込んで最初は半年ならという約束でしたが、結局2年暮らしました。そのころ私も入居していましたが、自分で身の回りのことをしっかりやっていました。

谷口：逆にいこつとで暮らしたことで健康管理が出来なくなって、ご両親含めて3回ぐらい話し合っただけで家に戻った人もいました。

黒澤：冷蔵庫の管理が出来ていないという話が入居者ミーティングで出ていましたね。もっともそれは稲澤さんも私も同じでしたけど（笑）。でもその方はいこ間でテレビを見て過ごすことが多かったのも、皆が集まりやすい雰囲気作りに一役買っていましたよ。いこ間に常に電気がついていて人がいるというのは大事でしたね。

●運営の苦悩

南山：私が運営に直接的に関わるようになったのは、いろいろあって一般の入居者がぐっと減ってしまっただろうという段階でした。その頃から運営が厳しくなっていました。

田口：谷口さんも危機感を持っていたことを覚えています。障がいのある人たちは自分の身の回りのことはできるので暮らしに問題は無いけれども、ほかの入居者がいないというのは、見守りの目が無く、コンセプトから外れるということ。

相馬：その頃からシェアハウス専門の募集サイトを使って一般の入居者を集めるようになり、さらに違和感が強くなっていったように思います。いこつとへの入居動機がコンセプトへの共感ではなく、恵比寿という立地や家賃の安さにシフトしていったという。もちろん希望者には入居前に説明はしていましたが、なかなか理解をしていただくのが難しかったですね。

田口：入居者が安定するまで、サポットの会メンバーが交代で泊まったりもしました。元えびす・ぱれっとホーム施設長の菅原さんにご主人にもご協力頂きました。非常手段でしたが、新しい入居者も含めてコミュニケーションが取れたりして良い機会にもなったと思います。

次号「～後編～」に続く

（事務局長 南山達郎）